

# 水上住居をたずねて

## アイルランド・クラゴーノウエン訪問記

堀 淳一\*

エニス (Ennis) はアイルランド西部、クレア (Clare) 州の州都。

州都といっても、そう、津和野ぐらいの感じの、小さな可愛らしい町だ。

ゴールウェイ (Galway) からのバスは、町はずれの、ガランとだだっ広い空地の一角に着く。これは実は国鉄のエニス駅前の広場なのだが、ゴールウェイからエニスを経てリメリック (Limerick) に至る国鉄線はもはや貨物だけしか運んでいないのだから、国鉄バスだからといっていつまでも停留所をこんなところに置き、町の中へ行くのにはわざわざ別のバス——それもすぐ接続していくなくて 10 分か 20 分も待たなくてはならないバス——に乗りかえなければならぬままにしておくのは不可解だ。しかし、多分、そんなところがアイルランドのよさなのであろう。

私はそのよさをさらによくして、バスに乗りかえず、町の真中の広場まで 1 キロの道を、ゆったりと歩いてたのしむことにした。

市の日だったらしく、空地をへだてた駅の向かい側の柵の中は、牛の大群でごった返していた。空は晴れていたが、いつもの年よりちょうど 1 ヶ月早くやってきた寒さで、まだ 10 月のはじめというのに、次々とトラックで運ばれてきて柵の中に追いこまれてゆく牛たちの吐息が、むんむんと白い。学校の屋内運動場ぐらいの広さの囲いの中には、駅のホームのような屋根が、何列か並んでいた。これからセリが行われるのだろうか。屋根の下でうごめく牛の群れの挙げる声が、強烈な臭いの雲といっしょに襲ってくる。それに追われるよう、私はその先の四つ辻を渡っていった。

間もなく、ガラリと変わって清潔でモダーンな

女子中学校が右手に現れる。2 年前の記憶が一陣の風のようによみがえって、懐しさに眼を細めさせる。その時とちがってゲートが開いたままになっていたのを幸い、校庭に入って、ズラリと並ぶ総ガラス張りの教室のすぐ外を歩いていったら、授業を受けている小さな女の子たちが、珍しそうに、しかしひニコニコとこちらを見るのだった。その何ともいえず愛らしい笑顔に思わずつられて微笑みながら、いやこれはいけない、授業の邪魔をしては、と足を早める。角を曲がって次の棟にさしかかると、今度は中学の上級ぐらいの女の子が、壁の外に一人で立っていた。

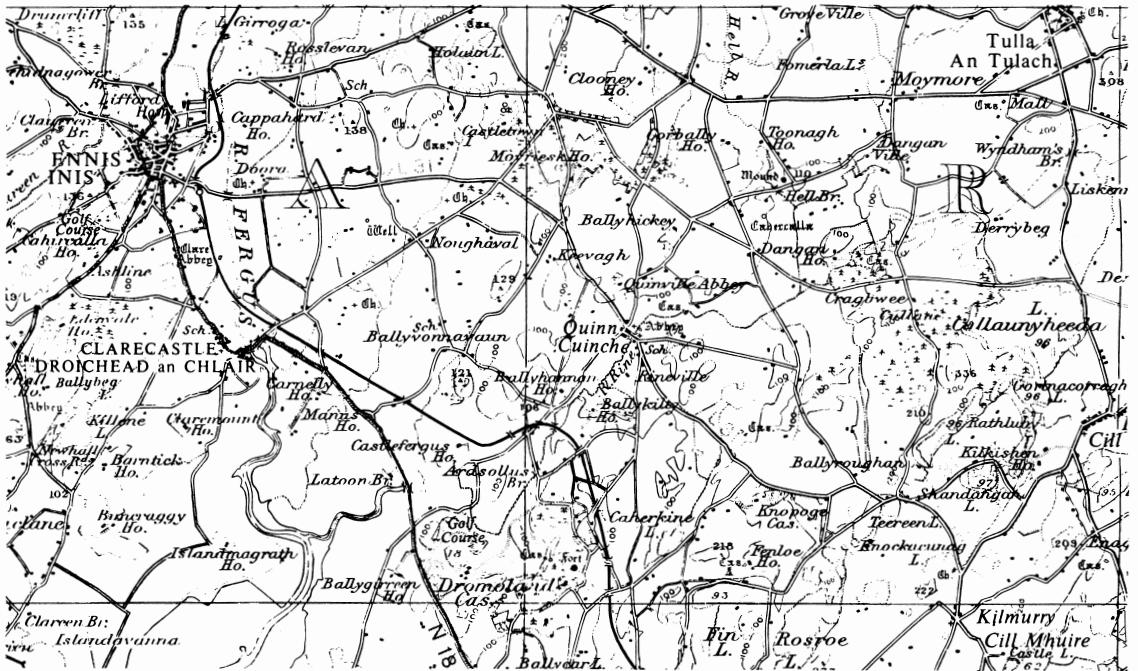
ハロー、と声をかけたのだったが、彼女は困ったような顔をして、横を向いてしまった。あれ、いつもなら相手もニコニコとあいさつを返すのに、どうしたんだろう——あっ、そうか、今は授業中なんだから、彼女は何か罰を受けて外に立たされているらしい、それなら、かえって悪いことをしたな、と、再び足を早める。

チラと教室の中を見たら、やはり授業中だった。教室の隅にマリア像が立っている。おやおや、ここはカトリックの学校なのだな。

校庭をあとにして狭い路地を中世風の商店街に抜けると、町の広場がもう、すぐ先に見えていた。

タクシーが 2 台、片隅に止まっていて、その 1 台の運転士が、外に出て所在なげに立っていた。その彼に「クイン (Quinn) のクラノッグを見に行きたいんですがね。そこで見てる間待っててもらって、帰りも乗せてほしいんだが」と頼む。クラノッグ (Crannog) とは、アイルランドの古代住居の 1 形式である水上住居のこと。クインはエニスの東 10 キロほどの町で、そのクラゴーノウエン (Craggaunowen) というところにクラノッグが復元保存されているはずだったのである。

\*エッセイスト



"SHANNON ESTUARY" 図幅（縮尺 1/126,720, アイルランド国土地理院発行）より

クルマはさっきの学校の前を通りすぎていった。「この学校は女の子だけの学校ですか？」と運転士（仮にQさんとしておく）に聞いてみる。「ええ、そうです。男の子の学校は別に、町の反対側にあるんです」「ははあ、じゃあ公立なんですか？」「ええ、国立です」「へえー、国立なんですかあ！」と、私はちょっと驚いた。2年前には尋ねてみる機会がなくて、女の子たちがそろっておっとりと上品で可愛らしかったものだから、勝手に上流階級のための私立学校なのだろう、などと考えてしまったので。

駅のすぐ北の跨線橋を渡ると、広々とのどかな牧草地帯だ。エニス市内を貫流するファーガス（Fergus）川の氾濫原。しかしそれはほどなく最終氷期起源の漂礫粘土地帯へと移行し、道は上り下りをはじめる。といつてもごくごくゆるやかなものにすぎず、地形図にも氷河地形分布図にも描かれているドラムリンたちはみな、広く低く、地を這うようなばかりで、あれはドラムリンだ！とつぶやかせるのに十分な盛り上がりは、一向に見えてこない。そして、道の両側のヘッジがただ延々と続き、靄がかかったようににぶく青白い空が、ただただ頭上に広がっていた。

やがてクインの町へ入ってゆく。といつても、

まばらな家並みが道ばたに500メートルほど続くにすぎない。左手に見えてきた巨大な廃墟を指して、Qさんが言う。「あれがクイン修道院ですが、見て行きますか？」ちょっと考えて答える。「いや、さきにクラノックへ行って下さい。修道院は帰りに時間があったら見ますから」

と、クルマはクインの町を抜けて、なおもどんどん走っていった。あれっ？ クラノックはクインの近くにあるのかと思ったが、さては遠いのかな？と首をかしげる私にかまわず。地図にはクラゴーノウエンという地名が載っていないのだ。

起伏がやや大きくなり、道はくねくねと曲がりだしたが、クルマはなおも止まろうとしない。ずいぶん遠いんだなあ、と思いながらにわかに変化に富んできた農村風景にみとれているうち、右側に湿原がひろやかに現れ、その中に銀白の水を茫茫と満てる湖が、眼に飛びこんできた。L11AがL31から右に別れる手前の湖だな、と地図を見ていると、Qさんはクルマを突然止めて、道しるべを注視してから、ほとんどUターンするばかりに大きくハンドルを切って、そこから北へ行く細い道に乗り入れた。

左側に続く丘の中腹を登りながら右側の湿原の中の一連の湖を眺め下ろしてゆく、いよいよ美し

い道だった。やがて行く手に小高い山が見えてきた時、Qさんが左を指して言った。「ほら、城があるでしょう」あわてて左を見ると、いつの間にか左側も小さな湖をポックリとはめた、樹林ゆたかな湿原と変わっていて、その湖のほとりに黒ずんだ古城が建っていた。

クルマは古城めざして降ってゆき、城の横の駐車場で止まった。なんだ、そこがクラグー・ノウエンなのだった。小高い山は336フィートの標高点のある山。湖はその西南麓の無名湖。クインからまた約10キロ、エニスからは約20キロの地点であった。

ゲートを入れると、鬱蒼とした森。そうか、ここは森林公園のようになっていて、その中にクラノッグがあるんだな——

管理事務所で切符を買い、案内リーフレットをもらって、奥へ進む。リーフレットによると、クラノッグだけではなく、古代の野外炊事場や環状砦(ring fort)など、それに古城そのものも、復元保存の対象になっているのだった。ジョン・ハント(John Hunt)という中世史家が自費を投じてこの土地を買い、まず城を修復し、ついでクラノッグその他の復元をはじめたのだが、彼の死後シャノン(Shannon)開発会社がその事業を引きついでいる、ということだった。

城の脇へ来ると、行く手の森の樹の間から、大きな藁屋根がのぞいているのが見えた。あれだ！あれがクラノッグだと、何はともあれそちらに向かう。森の向こうは湖の一つの入江で、その中にクラノッグが「浮んでいる」のだった。

アイルランドでは後期青銅器時代から12世紀に至るまで、水上住居が1つの主要な居住形態であった。あるものは17世紀まで実際に住まわれていた、といわれる。それは、次のようなものであった。まず湖の底に石を、その上に粗朶を、その上に太い木の枝や大きな材木や不用になったカヌー(丸木舟)などをぎっしり積み、まわりを木の杭で囲んで崩れないように固め、最後に土や砂をかぶせて、円形の人工島をつくる。そして島の上に住居を建てるのだが、それは、杭や小枝の網代組みに土を塗った円形または方形の壁に円錐形または寄棟型に樋を載せて藁で屋根を葺いた、掘立小屋であった。

だから、上に水上住居と書いたけれども、住居自体が水の上にあるわけでも、また水に浮んでいるわけでもなく、要するに湖中に埋立地を造成してそこに家を建てる、ということなのである。正確には「湖中埋立地式住居」とでもいったらよいのだろうか。

こういう住居形式が発達したのは、大昔には部族間でも部族内でも争いが絶えなかったので、めいめいの家族が外敵に対して防衛しなければならなかつたためらしい。それには家のまわりに濠をめぐらすのが1つの有効な手段だが、湖が天然に沢山だったので、それをそのまま濠として利用した、というわけなのであろう。

防衛力をさらに高めるために、家屋のまわりを円く木柵で囲む——つまり人工島の縁に沿って木柵をつくる——のが普通であった。

大昔につくられたままのクラノッグは、今はもう全く残っておらず、いくつかの湖に埋立地だけが辛うじて残っていたり、遺跡が発掘されたりしているにすぎないが、ここではそれが復元されているのである。

岸と島の間に架かる長さ20メートルほどの木橋に足を踏み入れると、まず眼につくのが、橋の向こう端をまたいでいる門だ。門、といっても、ただくぐるだけの門ではなく、正ちゃん帽のように深々とした藁屋根をかぶった大きな見張り台がデーン、と上に載っている、いわば楼門。それが、



写真1 クラノッグの入口

住居の大きさと原始性のわりに、ひどくモノモノしく見える。橋を渡って門をくぐると、2つの掘立小屋が左右に並んで、眼を圧する。右のはトンガリ帽子型の、左のは寄棟型の藁屋根をかぶって。直径6~7メートルぐらいの小屋にすぎないので、庇を1メートル半ほども突き出し、地面から僅か1メートルぐらいまで垂れ下がった、ほとんど直径と同じ高さの屋根をかぶっているので、まるで巨大なキノコのようにどっしりと重々しいのだ。門とそれぞれの小屋の入口とは、踏み固めら



写真2 クラノックの家の1つ

れた土にさらに敷かれた桟道で結ばれている。それを伝つていって右側の小屋をのぞく。鹿の皮、羊皮のマット、布製のケット、ズボンなどが壁にかかり、真中に暖炉が仕切られ、それを囲んで石臼、機織器、鍋型や壺型の土器、箕などが置かれていた。ついで左側の小屋をのぞく。これも似たようなものだが、こちらには炊事道具と機織器がなかった。男だけの家だったのか。

庭の真中には、石がこいの中に薪が動物の骨の積まれた、屋外炊事場があった。小屋には煙出しがないから、風雨のない日はここで炊事をしたのであろう。門と反対側に建つ、片流れ屋根の壁のない物置小屋の中には、泥炭の山があった。湖のまわりの湿原から切り出された泥炭は、大切な燃料だったのである。

再び橋を渡って岸にもどる。岸の一角にはベンチが置かれていて、休憩地になっているのだが、

岸辺に繁る叢で水面がかくされていて、見晴しはあまりよくない。小屋の群れを囲む木柵は見えるが、叢のすぐ向こうにあるようだ。そしてその木柵は、木柵といつても小枝を使って密に網代編みされているので、中がすけて見えず、3つの藁屋根だけがその上にポコポコと尖っていた。

人工島は直径30メートルぐらいだろうか。小さなもののだが、太古の技術では造成するのに大変な労力と時間が要ったにちがいない。それほどまでにしなければ安心して生活できなかつた、ということだ。しかも、平和な時でも、ドアもない入口から遠慮なく吹きこんでくる風は、さぞ寒かったことだろう。そして、夜の暗さが、さぞ戦慄的だったことだろう――

風はしかし、この日は全くなく、木の葉もそよともざわつかず、クラノックは湖と森の静謐に、すっぽりと包まれていた。だが、じっとしていると、忽ち空気の冷たさが肌にしみ入ってくるのだった。私はベンチに腰をかけるのを思い止まって、さらに森の奥へと、足を進めた。

森の中の空地に、その昔湿地を安全に歩くために小枝や蔓を敷きつめ、その上に木板を並べてつくった棧道が、復元されかけていた。1975年にロングフォード(Longford)県のコーリー(Corlea)というところで発掘されたものをここへ持ってきたのだそうだ。

その先の森の中には、野外炊事場と環状砦とが、



写真3 野外炊事場

こちらは2つとも完全に復元されていた。炊事場は四角く掘った穴に木製の桶をはめこんで水槽としたもので、火にかけて熱した石をそこに投げ入れて水を沸騰させ、それで肉を煮たのだ、という。この水槽と、燃料の木や熱するための石の置場とが1つのセットになっており、それが直径10メートルぐらいの環状の石積みで囲まれているので

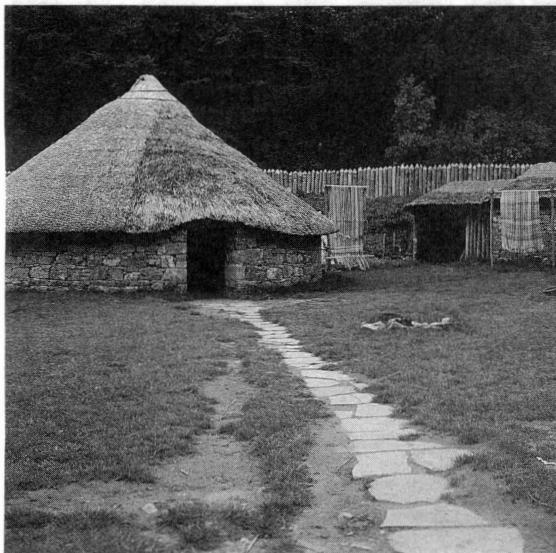


写真4 環状砦の内部

ここに復元されているのは、直径60メートルぐらいの環状の土堤で囲まれた敷地に、形はさっきのクラノックの家と同じだが、壁が木ではなくて石でできた藁葺きの家が2つ建っているものだった。家の中の様子はクラノックのそれとほとんど同じ。しかし、ぐんと広い庭の中に、前にはなかったものがいろいろ置かれていた。木製の大きな水桶、炊事用の石がこい、穀物をひく臼、土器を焼く窯、機織器、大小の鉄製容器、大型の物置小屋、などなど。

おもしろいのは、土堤の下をくぐる、ふだんは貯蔵庫として、外敵に襲われて防御し切れなくなった時には逃げ口として使われたという地下道。面白半分、最後にそれをくぐって外に出てみると、ちょっと足もとが危っかしく、不気味な暗さとつめたさに首筋・背筋がゾクゾクとする。しかし、敵に追われてここを抜けて逃げるさいの恐怖と動搖に比べればどうってことないさ、と苦笑しながら、駐車場にもどったのであった。

あった。

環状砦は、砦というのでモノモノしく聞えるけれども、普通の農家一式のことである。ただそれが、円形の石積みまたは土塁または木柵で防護されているので、砦といわれるのだ。5世紀から12世紀までの、最も普通の農家の形式で、アイルランド全土に4万戸もあったそうだ。



クインでクルマを降りると、リュックを背負った若い男女のペアが、一足先に修道院へのゲートを通ってゆくところだった。はろばろとした牧草地の中に小さくなつてゆくその姿を追う。しかし、修道院に着いた時は、彼等はどこにも見えなかつた。どこに消えたのだろう？

屋根が落ちてしまつて空に吹きぬけの空間が、やたらだだっ広く、寒々と空虚だった。興味を惹く彫像や装飾の石刻も全くない。やや白けて戻ろうとしたら、何と、ちょうど横にあった石段を、さっきのペアが降りてくるではないか。頂上まで登っていたのだ。

"Hallo! Was it nice?" "Yes, it's worth to see!" よし、じゃあオレも登ってみよう！

足もと心細い螺旋階段を昇り、かって屋根を支えていた高さ10メートルの壁のてっぺんをおつかなびっくり伝い、また狭い螺旋階段をそろそろ登って、サミットまで何とかたどりつく。20メートルもあろうかという高さと、足もとの心もとなさに、目まいがしそうだ。

だが、いい眺めだった。たしかに worth to see だ。直下に見下ろされるスケスケの修道院の区画——ここから見るとまるでポール紙細工のように薄っぺらな区切りの石壁が、今にもくずれ落ちるのではないか、とたよりない。ベージュか白の壁とグレーの屋根とのコントラストが、渋いながら美しいクインの家並み。町の反対側にひろがる一望のメドウ——小川がのどかにうねり、やわらかなスプレースグリーンの木立ちがモコモコと点在する、心なごむ風景。その木立ちが次第に鎧浅葱からライトターコイズに淡くかすんでゆくかなたは、同じ色合いの細いヘッジで区切られてゆるやかに波打ちながら低く這う丘なみ——

男女の姿は、またもやどこかに消えて、影もなかった。彼等はエニスから歩いてきたのだろうか？ ヒッチハイクだろうか？ また歩いてもどるのだろうか？ それとも、気ままにもっと歩いて、どこかでぶつかった民宿にでも泊るのだろうか？

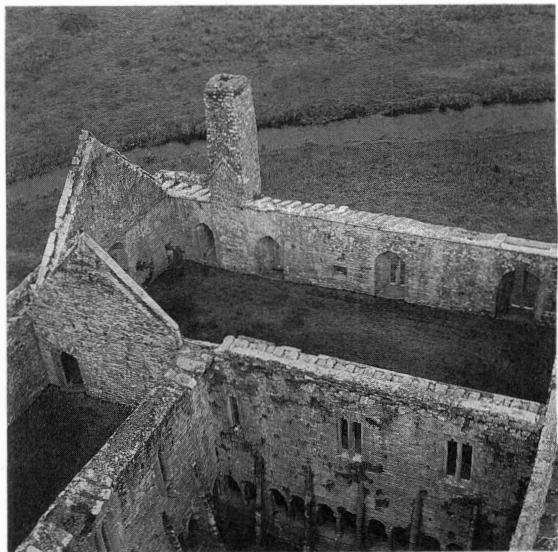


写真5 クイン修道院のサミットより